

シンポジウム報告

〈 今、アクティブに！ ノーマライゼーションへの道 〉

1993年3月7日、午後1時30分より大阪YMCA国際文化センターに於いて、プロップ・ステーション主催、大阪YMCA国際文化センター共催、朝日新聞大阪厚生文化事業団後援によるシンポジウム《今、アクティブに！ ノーマライゼーションへの道》を開催いたしました。

今年2月に重度障害を持ちながら教職への復職を果たした「曾我部教子さん」と、同様の障害を持つ「定藤丈弘さん」との対談をメインに、教育と就労に於けるノーマライゼーションについて、多くの皆様と考えたいと思い企画したものです。

シンポジウムの内容は対談とパネルディスカッションで、以下のメンバーで進行されました。

対談

曾我部教子さん（尼崎市立若草中学校教諭）
定藤丈弘さん（大阪府立大学社会福祉学部教授）

パネル・ディスカッション

曾我部教子さん・定藤丈弘さん
井殿恵二さん（曾我部教子さんを支援する会事務局長）
坂上正司（大阪頸髄損傷者連絡会相談役、プロップ・ステーション役員）

司会 竹中ナミ（プロップ・ステーション代表）

シンポジウムは、まず曾我部さんと定藤さんのご紹介、プロップ・ステーション及び今回のシンポジウムの流れの説明があった後、お二人の対談に入りました。（以下、敬称略）

竹中： 事故から今日まで3年間の曾我部さんの経過をお聞かせ下さい。

曾我部： 私が事故に遭遇したのは、1989年8月7日の事でアフリカ・ケニアのマサイ・マラ国立動物保護区上空を熱気球で展望していた時の事です。気球が着陸に失敗し、気が付いたときにはナイロビの病院にいました。頸髄3番を損傷し、首から下の完全麻痺となった私はすぐに帰国する事はできずスワヒリ語と英語だけの長い入院生活の中で、徐々に生きる気力を無くしつつありました。

2ヶ月後に人工呼吸器を着けたまま帰国した後、4ヶ月間関西労災病院（兵庫県尼崎市）で人工呼吸器をはずす訓練をしました。

やはり、自分の障害の程度について認識したときのショックが一番大きかったですね。

復職の希望は、私がICU（集中治療室）にいるときから持ち続けていました。退院後の生活



に対しては、施設へは入らず地域での生活を希求していましたが、私はずっと独身で生きていたため、介護や経済的問題などボランティアを求めて大学へ行ったり、ピラを配ったりしました。卒業生や、PTA、同僚教員などで創って下さった《支援の会》の方々による会合もたびたび行いました。

病院の理解もあり、昨年9月5日に念願がかない、マンションに入居する事ができました。私は、99%不可能だといわれても残る1%の希望に賭けてみたかったのです。

12月はじめ、復職願いを学校長に届けました。そして今年2月5日に条件つきで復職認可がおりました。《支援の会》の方々の精神的かつ物理的な励ましに感謝しております。

退院後2回の研修授業を経験し、教育というもののごたえを感じました。

2月8日には復職がかない、現在午前9時から午後4時30分まで研修に通っております。

定 藤： 家族や周りの人々の支援によって（重度障害者の）地域での生活が可能になったという事には意味があると思います。現職復帰という事に関して、日本の現実には10年くらい前から徐々に改善されてきたとはいえ、（曾我部さんが）重度障害の方である事を考えますと、これは大きなニュースであると思います。

私は先生の《自立の意識》、《教壇復帰への思い》の情熱に打たれました。《教壇に戻りたい》という事を自分自身の生きる支えとして来られた意志の強さを感じます。援助の輪が広がっていったという事も先生のお人柄によるものだと思います。

曾我部： 私は健康なときから、でもしか教師であった自分を「生徒によって教師にしてもらった」と思っています。心を開いて成長を見せてくれる生徒達が私を教師にしてくれたのです。そして私は教師という仕事に誇りを持つ事ができたのです。私はこの思いを命ある限り生徒達に返していきたいと思っています。

私は自分自身で考え作ったプリントで教育をしてきました。研修期間の今日この頃は、じっくり教科書を読んでいます。実際、教科書をこれだけ見たのは初めてです(^_^)。これからも、事あるごとに仕事（研修授業）を作ってもらい尼崎市教育委員会や他の教員達の見学を求めていこうと考えています。そして、そのための努力を欠かさないようにしております。

竹 中： これから曾我部さんが越えていかなければならない壁がいろいろとあると思うんですが？

定 藤： 私は16年位前に（1976年12月）交通事故にあいまして、翌年10月1日に職場復帰いたしました。頸髄損傷という事では、基本的に曾我部先生と同じ障害です。私の場合、肺活量は通常の1/3になってしまいましたが、この15年間1度も病気をした事はありません。自分なりに健康管理はしていますが、その人その人の障害に対して、《スタミナ》がついてくるのだと思います。事故の前に体が丈夫であったかどうか、事故後の健康維持によるスタミナ・アップにつながるのだと思います。あとは基本的に受け入れ体制の問題でしょうね。建物の改造、設備の充実などですね。例えば、2階にあった研究室を1階に移すとか、スロープを造るといった具合に…。（曾我部先生の場合は）プリントを資料にして話す講義形態の充実やスタミナをつけるため、授業の数をこなしていくといった事でしようね。

曾我部： 外国では、自立している障害者が多いそうですね。

定 藤： 私は以前、アメリカ合衆国のカリフォルニア州立大学バークレイ校(U.C.Berkley)に留学していましたが、向こうでは重度障害者の社会復帰というのは当たり前の事なんですね。

例えば、アメリカの障害者運動のリーダーの一人であるエド・ロバーツ(Edward Roberts)さんという方は四肢麻痺で、たった5分間呼吸器を離すと生きていられない状況にある方ですが、呼吸器を着けながら社会復帰をされています。私は彼とお会いしたのですが、自分の家に戻れるとすぐに自動的に酸素が供給され、減圧によって胸郭を開いて肺を動かす、いわゆる《鉄の肺》の中に入って、その中で生活していました。

U.C.Berkleyには重度障害者のための寮もあるんですよ。

アメリカには（身障者に）人的配慮を義務づける法律があるんですよ。例として、ペンシルバニア州で全盲の人が訴訟を起こし、州が敗訴し、公的介護者がついたといったケースもあります。アメリカは訴訟の多い国なんですが、このことが逆に（身障者の）社会復帰の道につながる事もあります。

これからは、日本という国に対して《アメリカ的机会平等》のシステムを前に押し出していくべきでしょうね。

曾我部： （日本の）教育制度では、公的費用ではたとえ重度障害者であっても介助者をつけることは難しいようですね。

定 藤： そうですね。まだ日本では前例がありませんね。

これはU.C.Berkleyでの話ですが、生物物理学専攻の全盲の学生が《トウモロコシの根の成長の研究》を希望したのです。それは、視力をもつ人にとっても大変な視覚作業を要するものです。しかし、（カリフォルニア州バークレイ）市は、必ず（学生も含め）公的な補助人をつけます。彼の場合、労働補助者と実験補助者が公的につきました。こういう配慮はイコール《人間の可能性の追求》であり、日本ではこれからの課題になるでしょうね。

しかし、日本でもそういう例があるんですよ。山形大学医学部の生徒だった方の話ですが、彼は在学中に頸損になり最初は自費で介助をつけていました。卒業後、国家試験にパスされ、今では患者さん達に信望のある精神科の医師になっておられます。

竹 中： 頸髄損傷という障害名が何度か出てきましたが、この障害について少し説明していただけますか？

曾我部： 頸髄というものは、背骨（脊髄）の中で脳に近い方の部分のことを言います。哺乳類の場合それは7つあり、脳に近い方から1番（C1）、2番（C2）…と呼びます。損傷した場合、その番号の若い骨ほど重い障害が残ります。例えば、4番損傷の場合は全身麻痺、3番ならば生存する事が困難な状態になったり、人工呼吸器をつける事になってしまいます。1番、2番の場合は、ほぼ即死状態ですね。（編集者注：損傷部位については脊髄（頸髄）そのものの損傷部位を示す場合と脊髄節（頸髄節）の損傷を示す場合がある。脊髄節とは脊髄と脊髄の間を構成する部分を示し、例えば第4頸髄節というのは第3頸髄と第4頸髄の間を意味する。ほとんどの脊髄損傷の場合は脱臼（あるいは亜脱臼）骨折になるので脊髄節の損傷を表す場合が多い。）

（以上、対談 以下、シンポジウム）



竹 中： ありがとうございます。

時間ですのでこれで対談を終え、パネル・ディスカッションに移りたいと思います。

パネラーの井殿さんと坂上さんをご紹介しますでしょう。

井殿さんは《曾我部教子さんを支援する会》の事務局長でいらっしゃいますが、自己紹介と会の活動経過などをお話ください。

井 殿： 当時私は曾我部先生と同じ職場で勤務しており、最初（アフリカへも）一緒に行く予定でした。1989年に事故の電話を受け先生の状況を知り、帰国のために特別機のチャーター便の費用が緊急に必要という事でカンパ活動を始めました。同年9月13日に帰国されたのですが、ICU（集中治療室）に入っておられるときに「家族の壁」というものをひしひしと感じました。先生は当時、気管を切開されて人工呼吸器を着けておられたため最初の面接の時は話される言葉を聞き取る事さえ困難でした。私が、初めて認識できた言葉は「教師がやれるかな？」という一言でした。

先生をどのように支援するかという事を考えた場合、とりあえずはお金からと思い、カンパ活動を続けました。また、話される言葉が理解できない故に面会に行くたびにいたたまれない感情を持ち、帰る時にはいつも心が暗くなったものです。私は先生にワープロをお勧めしました。

12月7日700通の支援願いを発送しました。そして、卒業生を集め河原で（支援のための）バーベキューパーティーを開催したおり、生徒達から「先生を頼みます」といわれました。このとき《支援の会》から曾我部さんに唇で入力するワープロをプレゼントする事ができました。そして引き続き、訴訟のための資金を集めました。

「復職が気になっていたが、思い通りにならなかった」曾我部先生の自立を支えたのは、生徒達の御家族からの厚い御支援の賜だと思っております。

竹 中： プロップ・ステーションでは、身障者の方が仕事を得る手段の一つとして、コンピュータ・セミナーを開催しています。

坂上さんからコンピュータ・ユーザとして、またプロップ役員として、同じ障害を持つ曾我部さんに何かアドバイスはありませんか？

坂 上： 僕は「身障者支援＝コンピュータ」とは思いたくはありませんが、確かに便利なものです。

僕はパソコン通信を通じてプロップの設立に関わるようになり、曾我部先生も又パソコン通信で知りました。そして、2年前に初めてお会いした訳です。そして出身校で《自立を支援す

る会》を開いて以来、曾我部先生の講演などがある度に僕も引っ張り出されると云うはめになってしまいました。(^^)

コンピューターは確かに全てではないですが、うまく使えば障害者もハンディ無しにコミュニケーションをとっていき事ができます。

現在、一般企業の営業でのプレゼンテーションの為にコンピューターの導入が拡大されたり、コンピューターを使ったプレゼンテーションを制作する会社などもできてきています。現在私達がセミナーで使っているApple社のMacintoshというパソコンではビデオ画像や音声、効果音やアニメーションなどを用いたプレゼンテーションを比較的簡単に作る事ができます。

また、Apple社などのアメリカの企業はリハビリテーション法やアメリカ障害者法によって障害者用のサポート機器を作ることが半ば義務づけられているため、様々な種類のサポート機器が出回っています。日本でも、新しくプロップのセミナーに加わっていただいたNEC社を中心に最近多くのサポート機器が出回るようになってきました。これらのソフトやサポート機器を用いてコンピューターを身近な道具とすることで曾我部先生が授業をすることが可能になると思います。

こういうソフトを使って模擬授業をしている小学校もあります。生徒への教育的効果も大きいと思います。

曾我部： 私はもともとパソコンといったものは大嫌いな人間でした。私はこれまで、教科書よりも自分自身で作ったプリントによる授業をしてきましたので、プリントを作れるかどうか自分が取っての死活問題となるのです。現在、私は井殿先生から頂いた98シリーズのパソコンを編棒の先にゴムを着けてキーボードを打って使っています。この時は、体を直角に起こして唇で作業しなければなりませんので、もっと楽にもっと楽しく仕事ができるものを探しております。

竹 中： アメリカでは、障害者用インターフェースを多くだしているという事です。リハビリテーション工学が充実していて、個人々々に合わせたものを作っているそうですね。

定 藤： バークレイ大学の生徒でしたが、彼は進行性筋萎縮症で公的に提供された音声入力コンピューターを使っていましたね。

坂 上： 機器によるサポートと人的介助がバランスよく提供されればいいんですが。

僕が大学2年のとき、理学部必修の実験授業を受けることになり、大学側は私専用の車いすでも使える実験機と実験助手（当時博士課程の学生）を付けてくれました。プログラムも実験器具も若干違うものを用意してもらいました。しかし、他の学生が2人1組で実験をする中、クラスの皆と少し離れたところで実験をすることになり、僕だけが何か違うことをやっている人いるように思われていたのではないかと思います。だから、3年の実験では話し合っ、僕も皆と同じカリキュラムを同じペースで学生と2人1組でやることにしました。もちろん、サポートの助手の方も付きましたが、殆どの事をことをベアの学生とこなし、どうしても2人でやらなければならない部分などを上手にサポートしてもらいました。そんなことから、やはり僕は《目立たないようにサポート》をしてくれる人間の必要性を感じます。

竹 中： このシンポジウムを開催するにあたっていろいろとご相談をさせていただいた国立特殊教育総合研究所の成田滋先生から「曾我部先生にあったサポート機器を共に研究し開発していきましょう。どんな協力も惜しみません」という御申し出がありました。

曾我部さん、教材作りにコンピューターの導入はいかがですか？

曾我部： それは是非ともチャレンジさせて頂きたいですね。

坂 上： 僕の毎日の生活にはコンピューターが欠かせないものになっていますが、成田先生の研究所では国内外のMacintoshに対応したあらゆるサポート機器が揃っていると言うことです。全身麻痺の人には音声や呼気を使って入力する装置もあります。プロップには高いレベルの技術者さん達がボランティアに関わってくださっていますので、曾我部さんのチャレンジ精神に応えることも可能だと思います。



竹 中： 曾我部さんが受傷後に行われた実験授業についてお話を聞きますか。

曾我部： 1つめは飛び入りで小学校4年生の1時間の授業でした。授業内容は理科で《電気》についてでした。プリントや実験材料の配布、その他色々な不安を持ったまま、ほとんど何の打ち合わせも無しに行いましたが、担任の先生の御援助のおかげで無事終了する事が出来ました。久しぶりの教壇の上で、私は「こういう幸せな事」があったのだという事を改めて感じました。

2つめは12月5日で、中学校の授業だったのですが、翌年2月6日に休職期間の期限が切迫していたため「これが私の最後の授業」だ、という気持ちを強く抱いて教壇に立ちました。しかし授業が進行するにつれ「生きている子供達に向かっていく」という意識がだんだんと大きくなり、逆に「最後の授業」という意識は徐々に薄れていきました。授業が終わる頃には「これを最後にしたくない！」という想いが強くなりました。私はこの時本当に心の底から、《教職は私にとって天職である》と深く感じました。

井 殿： 私は、曾我部先生の授業は、決して《上手に教え上手に学ぶ》ような授業ではないと思います。《一生懸命教え、子供が想像以上の事を学んで行く》、これが曾我部先生の授業であるという気がします。最初、御自身「無理なのではないか?！」と懸念されていた先生を教壇に引っ張り出したのは子供達であったと思います。今まで曾我部先生がやってこられた個性あるユニークな授業を続けて頂きたいという事も私達《支援の会》の願いの一つです。



定 藤： 曾我部先生の復職勝ち取りの意味とその大きさを感じますが、本当の意味での復職は、教壇復帰をしなければその意味は半減すると思います。これからは、段階的ステップを具体的に次々と踏んで行って頂きたい。そして、教壇復帰を完全なものにして頂きたい。そうされる事により、その意味はもっともっと大きくなるでしょう。先生が、不安に思っておられる生徒への気遣いなどの必要性は感じません。理科の授業での実験補助などは、生徒がどんな風に授業に参加するかと云う事に関わっているのです。子供はすぐに慣れます。障害は、決してハンディではなく、問題は《やる気・情熱》です。先生と生徒、相互の啓発により学習効果が現れるのだと私は思います。

教育に関する曾我部先生の哲学に感じ入りました。そのためにPTAからの支援があったのだと思います。重度障害者に対する社会の受け入れは、まだまだステレオ・タイプ的でありますし、これを打破するためにも是非頑張ってくださいと思います。

坂 上： 理学部の学生から見てもおもしろいと思える曾我部先生の授業に期待します。是非、もう1度お願いします。

曾我部： 事故に遭遇して以来、私が望んだ事が次々と実現していると思います。1つめは人工呼吸器の取り外し、2つめは切開した気管を閉じる事、3つめは地域に出て生活する事、そして復職、現場復帰。支援の人々に対して深く感謝いたします。現在「これが生きている事かな」という思いで一杯です。今後は気負う事無く頭をフルに回転させて1日も早く現場に出たいと思っております。その為の良い知恵など有りましたら是非教えて下さい。

今日はどうもありがとうございました。

竹 中： シンポジストの皆様、会場の様、本日は本当にありがとうございました。曾我部先生の復職はゴールではなくスタートなのだと思います。定藤先生が言われたように、日本のノーマライゼーションにとって大きなエポックである「曾我部先生の復職」を、本当の復職「教壇復帰」つなげるために今日のシンポジウムが役立つなら、こんなに嬉しいことはありません。これから曾我部先生が歩まれる人生の節目節目で、こうした会を開催し続けて行きたいと思えます。

今日は皆様、本当にありがとうございました。

(書記：米谷、松村、西村、編集：竹中、坂上)



シンポジウムに参加して

東京都神経科学総合研究所 松井和子

北九州市の向坊弘道氏の提案で、移動の困難な頸髄損傷者（以下、頸損者と略す）の交流の場“はがき通信”を始めて3年になる。この間、復学、進学一人暮らし、著書の出版、結婚、復職など頸損者の生活も大きな変化を見せてきた。その中でも曾我部さんの復職は私にとって新鮮な驚きであった。

その驚きは、曾我部さんの復職が介助者付きや実験を伴う理科の先生ということだけではない。曾我部さんには支援の会が結成されていて、その会が復職に一役買っているらしく、そのことも私の関心をそそった。

曾我部さんのように重い障害を持った人を元の仲間として職場復帰を呼びかけ、支援する、そうした人々を動かす曾我部さんとはどういう人だろうかと考えていたある日、突然、今回のシンポジウムの参加を呼びかけるFAXが届いた。

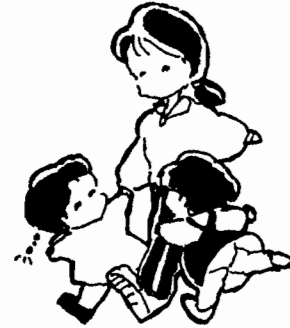
参加した感想は、1時間半という短時間の割には、司会の巧みさもあって曾我部さんの復職の経過や背景などのポイントがよく掴めたし、曾我部さんと定藤丈弘氏の対談からも貴重な情報が得られた。その中で“今回の復職はワンステップであって教壇復帰ではない、目標は曾我部さんが教壇に立つこと、これから曾我部さんが教壇に立てるまで注目していく”という発言は正論ではあるが、私には一抹の不安を感じさせた。

“復職は介助付きの出勤が条件だが、介助者の費用は自己負担、外国ではどうなっているか”という質問や“復職の希望は出したが、許可されるとは思っていなかった。実際に許可されてうろたえた”、“事故以来、頑張っていて、頑張っていると何度聞かされたことか、頑張ると言われるほど厭なことはない”と率直に言われる曾我部さんに教壇復帰の目標が重荷にならないようにと、曾我部さんと同年代で働くものとして願わずにいられないような気持ちになった。

一緒に参加したSさんも上司や同僚の熱心な勧めで復職したが、「けがする前から携わっていた仕事ですから、あせりを感じ始めるときがありません。こなせる仕事量、ペースは雲泥の差です。“いらだたしさ、もどかしさ”はもう気負いなのです」と手紙に書いてくる。また、T大神経内科の若いドクターは“もちろん無給ですが”と最近“復職”した知らせをはがき通信に寄せてきた。曾我部さんほど重度でなくても、頸損者の復職は少しづつ増えてきている。

曾我部さんのような重度の障害を持つ人達が、スピードや効率が最優先の職場に適應するのではなく、職場や労働条件が曾我部さんたち復職者を受け入れられように労働問題として取り組んでいければ、私たち（健常者）の働く環境も現在より数段改善されてくるのではないだろうか。

シンポジウムの参加者に意外なほど健常者が多かったことから、曾我部先生の復職が重度の障害を持つ人々にも健常者にとっても働きやすい職場作りにつながってほしいと切実に思った。



まとめ

曾我部さんと知り会ってもう2年近くになります。その間に、驚くような思い切った決断をされるときもあれば、ちょっとしたことで悩んでられたこともありました。この人は本当に中途障害者なのかと思うくらい障害を受容しているかと思えば、その逆のこともありました。しかし、長い目で見ると、曾我部さん御自身が言われているように、彼女の「願い」をひとつづつ確実に実現させています。ある程度歳をとってから障害を負うと、どうしてもそれまで持っていた健常者の価値観から抜け出せないものですが、曾我部さんの場合は逆にその人生経験を活かした生き方をされているようです。

今、そんな曾我部さんが自信をもって教壇復帰へ臨んでおられます。そして、一方で松井さんが言われるような過酷な労働条件が立ちふさがっています。曾我部さんが、その過酷な労働環境で無理をして働くのではなく、曾我部さんが働けるような労働環境をつくっていくこと、この考え方こそがシンポジウムの標題に掲げられた“ノーマライゼーション”なのです。

現状の労働環境は、障害者どころか健常者にとっても過酷なものです。物差を健常者を越えたところから障害者の方へ少しでも近付けることによって、曾我部さんを含め全ての重度障害者が不安なく働ける職場が増えていくことを願います。

(坂上)

PROP PRESS

障害乗り越えシンポジウム

重度障害を乗り越えて
二月に復職した尼崎市立中
学校教諭の曾我部教子さん(曾我部
と、車いすで教鞭(きょうべん)を
取る定藤丈弘・大阪府立大教授(定藤
談するシンポジウム「今、アクティブに！」
「マライゼーションへの道」(朝日新聞
大阪厚生文化事業団後援)が七日、
大阪市西区土佐堀一丁目の大阪
YMCA国際文化センター
で開催される。



曾我部教子さん



定藤丈弘教授

論教部我の崎尼 教授大府阪・藤定

きょう大阪で対談

曾我部さんは三年前、
旅行中に乗った熱気球の事
故で首から下がまひ状態に
なった。しかし、一日五時
間以内の就労マシンの同
伴——の条件付きで「復職
は可能」とする医師の診断
書を添えて復職願を市教委
に提出。今は教壇復帰を目
指して研修に取り組んでい
る。定藤教授は十六年前
に交通事故で首の骨を損
傷し、車いす生活になっ
た。
シンポジウムは、障害者
81・0041へ。

の雇用促進を支援する市民
団体「プロップ・ステーシ
ョン」(本部・大阪市北
区、竹中ナミ代表)が企
画。第一部で、二人が互い
の経験などを対談。第二部
で、曾我部さんを支えてき
た教師仲間たちも加わり、
復職への経過などを話し合
う。

午後一時半―三時、同セ
ンター九階で。入場料五百
円。問い合わせはプロップ
・ステーション(06・8

互いの経験や 復職への経過



写真 三 楽子 風見

公費の介護者制度の必要性提言

重度障害の先生ら大阪でシンポ

曾我部教諭と定藤教授



教職復職や障害者の社会参加などについて話し合う曾我部さんと定藤教授ら
＝大阪市西区土佐堀1丁目で

「復職は画期的なこと。教壇にも必ず復帰できる。」「首がぶくまひ杖輪と、いふ最重度の障害者を克服して二月に復職した尼崎市立中教諭の曾我部教諭さん(右)に、車いすで学生に教える定藤弘・

復職画期的なこと

大阪府立大教授まろが熱いエールを送った。二人の対談を中心としたシンポジウム「今、アクティブに！ノーマライゼーションへの道」が七日、大阪市西区土佐堀二丁目の大阪YMCA国際文化センターで開催された。関西や関東各地から教師や福祉関係者約六十人が出席し、障害者の社会復帰について話し合った。

シンポジウムは障害者のを擁護した経過や、その後就労を支援する市民団体のリハビリの苦しさ、復職「プロット・スナッシュ」の真実を話した。
二、竹中ナミ代表が企画。現在は尼崎市市内の教育センターに通って教材研究に
は、竹中代表が司会した。取り組む、教室への復職を最初、曾我部さんが一
九八九年八月にアフリカ旅行で乗った熱気が着地しての私を育ててくれまし
失敗し、頭脳(が)すいた。また教壇に戻りたいと

の一念でした」と話すの、参加者らは静かに聴き入った。
これに対し、定藤教授は「日本の現状では画期的なことだ。教育の問題だけでなく、障害者の雇用の点からもすばらしい」と評価したが、「教職復職がなければ、復職の意味は半減す

基本的に学校など受け入れ側の問題

る」とも述べ、本格復帰を強く期待した。
一方で、米国の例を挙げて「人工耳蜗装着された、曾我部さん(右)に車いす

障害のある人が、当たり前のように社会復帰を果たしている。基本的には学校など受け入れ側の問題だ」とし、公費による介護者制度の必要性を提言した。

定藤教授も七六年十二月に交通事故で頭脳を損傷。車いす生活を余儀なくされたが、翌年十月には大学に復職し、現在は社会福祉学の講義やゼミを担当している。
第一部では、曾我部さんを三年半支えてきた教師仲間や生徒の母親らでつくある「曾我部さん」を支援する会「メンバー」の二人が加わり、支援活動の夢などを振り返った。この中で、音声で入力するコンピュータなど曾我部さんが教壇復帰の際に活用できる機器の話も取り上げられた。
シンポジウム参加者の一人、奈良市の民間福祉施設「たんぼほの家」スタッフの成田修さん(左)は「障害のため本人が自由に動けないことが、周囲の人に対してはかえってプラスに働く」といふ点を再認識した」と話していた。

